

りて無事終局を告げしことあり。是れ余の勸學の獅子吼を受けし最後のものなりしと同時に、教壇上に於ける此の壯觀は恐らくは再び看難き者ならむ歟。

追懷と希念

末學 大村 桂 巖

故勸學勤息義城僧正の追弔號に何か書けとの事でしたが、此頃は非常に忙殺されて居りますので心ならずも何も纏める事が出来ませぬ、私は不幸にして勤息勸學からは授業は受けませんでしたから直接勸學からの影響や感化を受くる機會を持ちませんでした、併し私に學當時の高等學院は傳通院の傍にありましたので、時々勤學の風貌に接する事を得ました、尤も高等學院の教授を勤めて居られたので、學校内でも色々の噂も承りました、教員室で勤息勸學丈けはいつも昆布湯を召上がるのだとか、顯微鏡の事を望遠鏡と間違て居られて「望遠鏡で蟲を見れば……」と仰つしやつたとか言ふ事です、私は此事が非常に深く今でも印象して居て而して其が勸學に相應し

く尊く感ぜられるのです、決して其で以て勸學を輕蔑するの冷笑するのといふ事は毛頭無いのです、誠に此一逸話の中から勸學の尊い學風と強い學究心とに敬服させられるのです、それから又正月の始業式の席上、勸學の開講を聞いた事もありました、其時に勸學の宗乘に對する見識の高いのと信念の強固なのとに敬服しました、岡師流の唯一の學將とでも申すべきか、一步も譲らぬ所全く故神谷勸學に對する一敵國でありました、一度神谷勸學と勤息勸學との對論があつて討論劇烈を極め、兩横綱火の如く熱奮せられ傍に居るのも恐ろしい位でしたが、今になつて回想しますと、兩勸學のやうな學者は其時代でも今日でも一寸見當ぬかと思はれます、其後、京都の専門學院に轉任遊ばされてからも冬夏の休暇には必ず傳通院に歸て居られたが、東京へ歸へられると必ず帝大其他の大學の教授や學生等が常に佛教學に對して教を受けに來たものだ、と聞いて居ました、併し勸學の學問は時代思想といふ様な方面には没交渉であつたやうです、(その)この所です、前に望遠鏡の事を申しましたのは、思想上から宗乘を如何う見るといふ様な見方はされなかつた様です、傳統的の堅い學者であつたのです、而して人の質問などに對して長い答辯はされず、何の書の何丁の何行を見よ、といふ事を縦横自在に引證される、記して歸て調べて見るとちやんと其通りあ

るので皆敬服したといふ事です、非常に記憶のよかつた方であつたらしい、併し其れとても攻學研鑽の功が積もつたものでありませう、若い時代には仲々苦學せられたといふ事も聞きました、私は幼少の時此話を聞きまして(今は略しますが)非常に發奮させられました、又勤學在任時代に傳通院が火災にかゝりました、其當時勸學は専門學院教授で京都に居られたが、誰かが「勸學のお寺が焼けまました、東京の傳通院が焼けまして」とお見舞を言つたら「あ、有爲法だからね」と仰つしやつたと言ふ事です、私は之にも敬服して居ります、實に徹底せられたものだ、私は此一言より大なる暗示を受けて居ります。

要するに故勸學の徳は色々の方から伺はれませうが、私は學者として伺ふ事が最も勸學を徵象するに適して居ると思ひます、學者としては前述の如く宗乘餘乘に通ずる大學者で殊に問師を祖述せられ、傳法上に於ける一家見を持ち堅く取て動かれなかつた我宗學史上一雄將であります、其學問が思想に交渉して居なかつた事は一遺憾だと思ひます、併し之は考へやうで、徳川時代殊に幕府晩年の佛教界は教勢沈滞し僧侶の思想涸渇し、明治維新と共に佛教滅せんとする秋に當て如此深刻な學究生活させられたといふ事は其丈けにて十分の偉勲を認めなければならぬ、佛學殊に

宗乘の傳達に貢献せられた丈で偉大なる一事業であつた、之を彼是と言ては罰が當る、唯だ茲に吾人末學の心すべきは現代の宗學振興に對する態度である、現代は何と言ても思想に交渉を持たなければならぬ、今後の學究の生命は時代の思想を顧みて以て新しく思想を再造するものでなければならぬ、思想に生きる事です、考證も訓話も全然不必要だとは言はないのです、唯だ其れ丈で終てはならぬと言ふのです、否な寧ろ論疏等の末書に拘泥せず經文の金言に直入しなければならぬ、實に先輩の事業を眞に活かす事が今後の宗學者の責務であり又榮養であると思ひます、今や方に宗祖開宗七百五十年の記念に際し、故勸息勸學の此追吊を意味あらしむる恰好の聖業は宗學の新研鑽であると思ひます、若し此事業にして着々進捗する事が出來れば故勸學の靈を慰むるに足るものとなるのみならず其聖業の生命其ものが故勸學の還相回向遊ばしたものと勸喜する事が出來ます、誠に不遜な筆致も加りまして故勸學の靈前を驚かしたかも知れませぬが自分としては如此赤稜々の希念を詮表した事が眞に追吊の意に副ふものと考へましたので冗長ながら蕪辭を列ねた次第であります、南無阿彌陀佛。